

予防接種を受ける前に知っておきたい事

1. 予防接種の種類

予防接種に使う薬液のことを「ワクチン」といい、つくられ方によって3つの種類があります

種類	特徴
生ワクチン	生きた細菌やウイルスの毒性を弱めてつくられたワクチン → 接種すると体の中で細菌やウイルスが増え、その病気にかかった場合と同じように免疫ができます。
不活化ワクチン	細菌やウイルスを不活化し（＝殺し）、免疫をつくるのに必要な成分を取り出して毒性をなくしてつくられたワクチン → 生ワクチンや自然に感染した場合に比べて生み出される免疫（抵抗力）が弱い ため、何回か接種することで免疫をつくります。
トキソイド	細菌の毒素だけを取り出し、毒性を弱めてつくられたワクチン

2. 予防接種の間隔

令和2年10月より、異なる種類のワクチンを接種する際の接種間隔のルールが一部変更されました。

種類	内容
生ワクチン	BCG, 麻しん風しん混合, 水痘, おたふくかぜ, ロタ など
不活化ワクチン	ヒブ, 肺炎球菌, B型肝炎, 四種混合 (DPT-IPV), 不活化ポリオ, 日本脳炎, 二種混合 (DT), 子宮頸がんインフルエンザ など

- 生ワクチン→生ワクチン … 中27日以上あける
- 生ワクチン→不活化ワクチン … 接種間隔に制限はなし
- 不活化ワクチン→生ワクチン、不活化ワクチン … 接種間隔に制限はなし

※ただし同一のワクチンを接種する際は、ワクチンごとに決められた接種間隔を守ります。
各ワクチンに定められた接種間隔を守って接種しましょう。

<病気にかかった後>

かかった病気	治ってから予防接種までの間隔
麻しん（はしか）	4週間程度
風しん、水痘、おたふくかぜ	2～4週間程度
その他のウイルス性の病気 （突発性湿疹、手足口病、りんご病、インフルエンザなど）	1～2週間程度

この間隔は、免疫機能や体力の回復状況から考えられた目安です。病気の経過などによっても変わる場合があります。また、これらの病気にかかっている人と接触した疑いのある方も、一定の期間をあけないと接種を受けられない場合があります。最終的には医師の判断となりますので、事前に医師にご相談ください。

3. 予防接種を受けるときの確認事項

予防接種を受けに行く前のチェック

- 接種を受ける方の体調は良いですか。普段と変わったところはありませんか。
- 受ける予防接種について、市から配られた説明書または「予防接種と子どもの健康」等を読み、効果や副反応について理解しましたか。
- 接種を受ける前後の注意事項（下記）を確認しましたか。
- 母子健康手帳（お子さんの場合）・予診票・健康保険証・自己負担金（おたふくかぜ、インフルエンザ、高齢者肺炎球菌等、任意接種の場合）は持ちましたか。

受ける前の一般的な注意

- ・（お子さんが予防接種を受ける場合）当日は、朝からお子さんの状態をよく観察し、普段と変わったところのないことを確認しましょう。
- ・接種を予定していても、体調が悪いと思ったら医師に相談の上、接種をするかどうかを判断するようにしましょう。
- ・受ける予定の予防接種について、必要性や副反応についてよく理解しましょう。わからないことは、接種を受ける前に医師に相談しましょう。
- ・予診票は、接種する医師への大切な情報です。責任をもって記入するようにしましょう。
- ・（お子さんが予防接種を受ける場合）日頃の状態をよく知っている保護者の方が連れていきましょう。

予防接種を受けられないのはどんなとき？

- ・明らかに発熱がある（37.5℃以上）
- ・重い急性の病気にかかっている
- ・受けるワクチンの成分によってアナフィラキシー（※）を起こしたことがある方
※ アナフィラキシー・・・接種後30分以内に起こるアレルギー反応。じんましんなどの皮膚症状や、腹痛・嘔吐などの消化器症状、息苦しさなどの呼吸器症状があらわれます。
- ・（BCGの場合）予防接種や外傷等によるケロイドが認められる
- ・その他、医師が不適応な状態と判断した場合

予防接種を受ける前に、医師と相談が必要な方



- ・心臓・腎臓・肝臓・血液の病気、発育障がいなどで治療を受けている方
- ・予防接種後2日以内に、発熱・発しん・じんましんなどアレルギーと思われる症状がみられた方
- ・今までにけいれん（ひきつけ）を起こしたことのある方
- ・今までに免疫不全の診断をされた方、近親者に先天性免疫不全症の方がいる場合
- ・予防接種の成分に対してアレルギーを起こすおそれのある方
- ・（BCGについて）家族に結核患者がいて長期接触があった場合など、結核感染の疑いのある方

予防接種を受けた後の注意事項

- ・接種後30分程度は、医療機関で安静にするか、医師とすぐに連絡が取れるようにしましょう。急な副反応はこの間に起こることがあります。
- ・生ワクチンでは接種後4週間、不活化ワクチンでは接種後1週間は、副反応の出現に注意しましょう。
- ・接種した日の入浴は差し支えありませんが、接種部位をこすことはやめましょう。
- ・接種当日はいつもどおりの生活がかまいませんが、はげしい運動は避けましょう。
- ・接種後、接種部位のひどい腫れ、高熱、けいれんなどの体調の変化があった場合は速やかに医師の診察を受けましょう。

4. 各ワクチンの説明と副反応について

予防接種の目的（免疫をつけること）以外の作用を副反応といいます。副反応には、接種部位に起こるもの（赤くなる、腫れる、しこりになる等）と全身に起こるもの（発熱、けいれん、ショック等）があります。

 : 不活化ワクチン  : 生ワクチン

種類	ワクチンと病気の説明	副反応
ヒブ	ヒブ（インフルエンザ菌b型）による感染症を防ぐワクチンです。感染すると脳を包む髄膜炎の炎症（髄膜炎）や、肺炎などを起こすことがあります。髄膜炎になると、脳に障害が残ったり、亡くなるおそれがあります。	接種部位が赤くなる、腫れる、しこりになる、発熱など ごくまれ（0.1%未満）にショック、アナフィラキシーなど
小児用肺炎球菌	肺炎球菌による感染症を防ぐワクチンです。肺炎球菌感染症では、髄膜炎や菌血症（血液に肺炎球菌が入り高熱などの症状が出る）、肺炎、中耳炎といった病気を起こします。肺炎球菌には90種類以上の細菌の型があります。その中で、お子さんが感染したときに重い病気を起こしやすい13種類の細菌の型について免疫ができるよう作られています。	接種部位が赤くなる、腫れる、しこりになる、発熱など ごくまれ（0.1%未満）にショック、アナフィラキシーなど
B型肝炎	B型肝炎ウイルスの感染を防ぐワクチンです。ウイルスに感染すると肝炎を起こし、発熱やだるさ、黄疸などの症状が出ます。感染する年齢が小さいほど、肝炎の症状が軽いもしくははっきりしない一方、ウイルスが肝臓に潜み続ける可能性が高いといわれています。ウイルスが肝臓に潜み続けると、大人になってから肝硬変や肝臓がんになることがあります。	接種部位が赤くなる、腫れる、しこりになる、頭痛、だるさなど ごくまれにショック、アナフィラキシー、多発性硬化症（頻度不明）など
四種混合（DPT-IPV） 二種混合（DT）	ジフテリア（D）、百日咳（P）、破傷風（T）、ポリオ（IPV）を予防するワクチンです。 ・ジフテリアは、のどや鼻の粘膜に感染します。症状は、高熱、のどの痛み、犬吠えの様な咳などです。菌の出す毒素によって心臓や神経の麻痺を起こすことがあります。 ・百日咳は、かぜのような症状から始まり、連続的に咳こむようになります。肺炎や脳症など重い合併症を起こしやすく、生後6か月未満でかかると死に至る可能性が高い病気です。 ・破傷風は、土の中にいる菌が傷口から体の中に入ることによって感染します。菌の出す毒素によって、けいれんや呼吸困難を起こします。 ・ポリオ（急性灰白髄炎）は「小児まひ」を起こすウイルスです。ウイルスに感染すると、発熱、頭痛、嘔吐などかぜの様な症状が出る場合もあれば、手足の麻痺を起こす場合もあります（感染した人の中で約1000～2000人に1人程度）。麻痺が進行すると、呼吸困難で亡くなることもあります。	四種混合ワクチン 接種部位が赤くなる、腫れる、しこりになる、発熱、下痢、嘔吐など ごくまれ（0.1%未満）にショック、アナフィラキシーなど 二種混合ワクチン 接種部位が赤くなる、腫れる、しこりになる、発熱、めまい、だるさ、下痢など ごくまれ（0.1%未満）にショック、アナフィラキシーなど
BCG	結核を予防するワクチンです。結核に対する免疫はお母さんからもらうことができないので、生まれたばかりの赤ちゃんも、結核にかかる心配があります。乳幼児がかかると、全身性の結核や結核性の髄膜炎になることもあり、重い後遺症を残すおそれがあります。	接種後10日～4週間：注射部位に赤いポツポツができる、はれる、うみが出るなど 接種後1～3か月頃：わきの下やリンパ節が腫れるなど ※接種後3～10日頃に接種部位の発赤、腫れ、うみが出た場合（コッホ現象）は受診する ごくまれにショック、アナフィラキシー、骨炎など

種類	ワクチンと病気の説明	副反応
麻しん 風しん 混合 (MR)	麻しん（はしか）・風しん（三日はしか）を予防するワクチンです。 ・麻しんは感染力がとて強いウイルスです。発熱、咳、鼻汁、めやに、発しんが主な症状です。合併症として気管支炎、肺炎、中耳炎、脳炎（約1000人に1人）などがあります。 ・風しんは軽いかぜの症状から始まり、発熱、発しん、首のリンパ腺が腫れるなどの症状が出ます。妊婦が妊娠早期にかかると、「先天性風しん症候群」を起こすおそれがあり、心臓の病気や難聴、白内障などをもつ赤ちゃんが生まれる可能性があります。	発熱、発しん 接種部位が赤くなる、腫れる、じんましんなど ごくまれ（0.1%未満）にショック、アナフィラキシー、脳炎、けいれん、急性散在性脳脊髄炎（頻度不明）など
水痘	水痘（みずぼうそう）を予防するワクチンです。 水痘は水痘帯状疱疹ウイルスという感染力の強いウイルスによる感染症です。発熱、水ぶくれを伴う発しんが主な症状です。まれに、肺炎や脳炎などを合併することがあります。	接種部位が赤くなる、腫れる、しこりができる、発熱、発疹など。ごくまれ（0.1%未満）にアナフィラキシー、血小板減少性紫斑症
日本脳炎	日本脳炎を予防するワクチンです。 蚊によって運ばれる日本脳炎ウイルスにより感染します。主な症状として、発熱、頭痛、嘔吐、意識障害、けいれんなどがあります。感染すると約100～1000人に1人が脳炎を発症するといわれており、神経に後遺症が残ったり、亡くなる可能性があります。	接種部位が赤くなる、腫れる、発熱、咳、鼻水、だるさなど ごくまれ（0.1%未満）にアナフィラキシー、急性散在性脳脊髄炎など
子宮頸がん	HPV（ヒトパピローマウイルス）による病気を予防するワクチンです。 HPVは皮膚や粘膜に感染し、子宮頸がん（子宮の入り口にできるがん）や尖圭コンジローマ（生殖器にできるイボ）の原因になるウイルスです。100種類以上のウイルスの型があり、16型・18型と呼ばれるものが子宮頸がんの約50～70%を引き起こすといわれています。16型・18型の感染を予防する2価ワクチン（サーバリックス）と、尖圭コンジローマを引き起こす6型と11型の感染も予防する4価ワクチン（ガーダシル）があります。	発熱、接種した部位の痛み、腫れ、注射の痛みや恐怖などをきっかけとした失神、全身の脱力、筋肉のこわばり、疲労、だるさなど （頻度不明）アナフィラキシー、急性散在性脳脊髄炎、ギランバレー症候群など
インフルエンザ	インフルエンザの発症や重症化を予防するワクチンです。 インフルエンザの症状には、高熱、頭痛、関節痛、全身のだるさなどがあります。お子さんではまれに脳症を、高齢の方や免疫力の低下している方では肺炎を伴うなど、症状が重くなったり命に関わることもあります。 ワクチンには、卵の成分が少量含まれています。卵アレルギーのある場合には、接種について医師とよくご相談ください。	接種部位が赤く腫れる、発熱、頭痛など ごくまれ（0.1%未満）にショック、アナフィラキシー、急性散在性脳脊髄炎、（頻度不明）脳炎、肝機能障害など
おたふくかぜ	おたふくかぜ（流行性耳下腺炎）を予防するワクチンです。 おたふくかぜの主な症状は、発熱、耳の下（耳下腺）・あごの下（顎下腺）の腫れです。合併症として、髄膜炎や難聴（約1000人に1人程度）があります。おたふくかぜによる難聴（ムンプス難聴）はかかると治すことが困難だといわれています。また、思春期以降にかけると精巣炎や卵巣炎を起こすおそれがあります。	接種部位が赤くなる、耳の下（耳下腺）の腫れなど ごくまれ（0.1%未満）にショック、アナフィラキシー、無菌性髄膜炎、急性散在性脳脊髄炎など
ロタウイルス	ロタウイルスによる病気を予防するワクチンです。 ロタウイルスは小腸のひだに感染し、細胞をこわします。その結果、小腸が水分をうまく吸収できず、激しい下痢をおこします。乳児の場合、特に注意が必要です。脱水の程度により、経口補液・点滴での輸液を必要とすることもあります。	嘔吐・下痢などの胃腸炎症状が5%未満のお子さんで見られるが、いずれも軽症です。数万接種に1例程度、腸重積の発生があります。
成人用肺炎球菌（23価）	肺炎球菌による肺炎などの感染症を予防し、かかった場合でも軽くすむ効果が期待されます。 肺炎にかかると、発熱、咳、呼吸困難、食欲がなくなる等の症状がみられます。 肺炎球菌には90種類以上の細菌の型があります。その中で、感染する頻度の高い23種類の細菌の型について免疫ができるよう作られています。	接種部位が赤くなる、痛み、はれ、熱感、など ごくまれ（0.1%未満）アナフィラキシー、血小板減少、ギランバレー症候群など